

展示ブース

(東京レガシーハーフマラソンEXPO 2025 内)

「東京レガシースタジアム2025」の展示ブースが10月17・18日の両日、国立競技場に設けられました。

「東京レガシーハーフマラソンEXPO 2025」の一環。2つのブースでは11月、12月のスポーツイベントが紹介されました。

東京都の東京2025デフリンピックPRブース

11月にデフリンピック国内初開催

東京都の東京2025デフリンピックPRブースでは、11月15～26日に開かれる大会について「無料で観戦ができます」と来場を呼び掛けられました。

デフリンピックは、聴覚障がい者が参加する、おおむね4年に1度の国際スポーツ大会。1924年にパリで始まり、第25回にして日本で初めて開かれます。70～80カ国・地域の選手約3000人が陸上、水泳、バスケットボールなど21競技で競います。都内をメイン会場に、福島県ではサッカー、静岡県では自転車が実施されます。

世界から聴覚障がい者が集まるのを前にブースでは先端機器が紹介されています。

「言葉がすぐに表示される。すごい」。来場者を驚かせたのは「ワイワイシステム」という表示機器。発した声がすぐさま文字となって透明板に表示されます。自動車部品メーカーのアイシン（愛知県刈谷市）が開発。インドネシア語、シンハラ語など31カ国語に対応し、きき取れない人に文字で即座に伝えます。情報通信研究機構などが開発したアプリ「こえたら」はスマートフォンで手軽に文字によるコミュニケーションが可能です。

陸上競技の「光刺激スタート発信装置」は、ピストル音の代わりに光でスタートを知らせます。短距離用の場合、足元付近に置き、クラウチングスタートが切れます。中長距離用は、立った姿勢で視認できます。

「Hapbeat（ハップビート）」はテレビからの音を振動で伝える機器。テレビと胸元のセンサーをつなぐことで、卓球のコン、コン、といったプレー音、躍動感を感じとれます。耳からの情報を補うこれら機器がデフリンピックで採用されるかもしれません。

スタッフいち押しの注目競技は、オリエンテーリング。五輪にはない競技です。伊豆大島の道なき原野を地図とコンパスを手に踏破します。海外からの選手も東京の秘境を体ごと感じてくれそうです。

「目に見えない障害」といわれる聴覚障がい者。「話すのをきいて、びっくりされ、辛い思いをしています」と千葉県の40代のスポーツトレーナーの女性。もう学校に務めた経験があり、ブースを訪問しました。言葉を発するのが不得意な人は、あれっという顔をされることが多いそうです。自由に話せる人、手話を使う人、口の動きを読み取る人。初めてデフリンピックが国内開催され、歴史的なことだとデフの人たちは盛り上がっています。喜んで、すごく燃えています」

手話ができる50代の中野区女性職員は、同区がテコンドー会場になることから立ち寄りました。「地元の人もデフリンピックの応援に行きます」と関心を寄せます。

ブースでは、PR用のバッジ、うちわが配られ、ガチャガチャには、デフリンピックに初めて接する人も列をつくり、グッズを受け取りました。

開会式、閉会式を除き、競技は事前申し込みなく、無料で観戦できます。顔の側面に両手を挙げて、ひらひらさせるのがデフ競技での拍手。「手話も覚えられるかもしれません」とスタッフ。「ありがとう」は左の手の甲から右手を上げるしぐさで伝わります。

きこえない世界ときこえる世界が入りまじる12日間。開催100周年をうたう東京大会の見どころがブースに詰め込まれていました。

GRAND CYCLE TOKYO（グランドサイクル東京）ブース

自転車でTOKYO感じて

「フルマラソンも走りますが、自転車は瞬間の力が必要。きつい。マラソンとは全然違う。けれど楽しい」

「VRサイクリング」が設置された「GRAND CYCLE TOKYO（グランドサイクル東京）」のブースでは、時速47キロを出した中野区の50代男性がゴールの後、すがすがしい笑顔を見せました。

室内用エアロバイクに似た設置型自転車。目の前の映像と連動しています。ペダルをこぐと、国立競技場外周1.7キロの景色が変わり、実際のコースを進む感覚が体験できます。登り坂では足元の負荷が重くなり、力を込めると速く進みます。競技場に入り、ゴール。達成感も味わえます。

東京都は東京五輪のレガシーとして自転車の魅力を伝える施策を進めています。プロジェクト名は「GRAND CYCLE TOKYO」。プロジェクトのひとつ、湾岸の最長約37キロを自転車で走り抜ける大会「レインボーライド2025」は2025年で4回目。12月7日（日）、東京・台場を発着点に約6000人が参加します。

エントリーは締め切りましたが、同日午前9時30分～午後3時30分、フィニッシュエリアでイベント「マルチスポーツ」が設けられ、自転車ファンやファミリーが入場無料で楽しめます。約2万人でにぎわいそうです。

BMX試乗やデモンストレーション、米国で人気のラケットスポーツ・ピックルボール、スケートボードの体験、バスケットボールやサッカーのコーナーも設けられます。約20のキッチンカーがお店。フリー・マーケットでは自転車グッズが販売されます。タレント稻村亜美さん、武井壯さんもスポーツの楽しさを伝えます。VRサイクリングのコーナーもあります。

開催が危ぶまれた東京五輪。「コロナ禍の中で、自転車が通勤に用いられました。競技としての自転車も大事にしたい」と都担当者。レインボーライドは「宇都宮ジャパンカップサイクルロードレース」のようなトップ選手のレースではなく、一般の人が参加する約37キロ、20キロ、8キロのファンライド。レインボーブリッジ、東京港海の森トンネル、東京ゲートブリッジなど普段は走れないコースで潮風を切れます。

国立競技場のブースでは、VRサイクリング体験で自転車の魅力を伝え、エコバッグやボールペンをプレゼントしました。50代女性は「脚のグリコーゲンを使っちゃった。また貯めないと」。2日後の東京レガシーハーフマラソン出場を前にVRサイクリングに夢中になっていました。